

Atomic Evangelists: An Investigation of the
American Atomic Narrative Through News and
Magazine Articles, Official Government
Statements, Critiques, Essays and Works of
Non/Fiction

高田, とも子

<https://doi.org/10.15017/4059961>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名	高田 とも子			
論 文 名	Atomic Evangelists: An Investigation of the American Atomic Narrative Through News and Magazine Articles, Official Government Statements, Critiques, Essays and Works of Non-Fiction (アトミック・エヴァンゲリスト：マスメディア・公式声明文・批評・エッセイ・ノンフィクションにみる米国の原爆言説に関する研究)			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	高野 泰志
	副 査	九州大学	教授	鶴飼 信光
	副 査	九州大学	教授	高木 信宏
	副 査	福岡女子大学	特任教授	小谷 耕二

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

日本の核言説は伝統的に被爆者の証言を重んじてきたが、アメリカにおけるヒロシマ・ナガサキの表象はそれとは大きく異なっている。特に旧ソ連との核開発競争が激化した冷戦期に生み出されたテキストは膨大な数に上っているが、いずれも終末論的参照枠に依拠したものであり、核に対する見方は両国で根本的に異なっている。本論文はこうした「米国の核の語り」が形成されていく過程において広く流通した新聞・雑誌記事、政府による公式声明、科学者によるエッセイ、キリスト教会による声明文、論説などを、歴史学による先行研究に依拠しつつ、文学的手法によってテキストのレトリック分析を行っている。その結果、広島・長崎への原爆投下から現代にいたるまでの米国の核の語りの諸相を明らかにしているのである。

第 1 章は、広島・長崎への原爆投下直後に執筆された現地ルポルタージュを取り上げ、当事者でない語り手がヒロシマ・ナガサキを表象する語りの問題点や、捕虜証言が長崎原爆と併存して記述されることの政治性を暴き出している。

第 2 章は、マンハッタン計画の公式スポークスマンであるウィリアム・ローレンスの原爆報道を分析している。ローレンスの語りは、原爆という未知なる存在を大衆にも分かりやすく解説したという点で重要であるが、原子力を「神なる力」とするレトリックの背後には、世界を「善と悪に分断する」という全体主義に通じる危険な二分法が潜在することを指摘している。

第 3 章は、1946 年に雑誌「ニューヨーカー」に発表されたジョン・ハーシーの『ヒロシマ』がセンセーショナルな社会的反応を呼び起こした背景を検証し、キリスト教会による反核声明や科学者による論説が、『ヒロシマ』への布石となった可能性を論じている。

第 4 章は、文明史家・文学批評家ルイス・マンフォードによる核批評を取り上げ、アメリカの公式声明や報道に代表されるユダヤ・キリスト教的レトリックを転覆させている点で 21 世紀の核批評につなげていくべき重要なテキストであると主張している。

第 5 章は、2015 年に出版されたスーザン・サザードによるノンフィクション『ナガサキー核戦争後の人生』を手掛かりとし、原爆がアメリカで言語化・物語化される際の問題点を分析し、過去 75 年にわたる核言説史に修正を迫るものであると結論づけている。

以上のように、本論文はこれまで歴史学の研究資料として扱われてきたテキスト群を文学的に解

積することによって、現在に至るまでアメリカで生み出されてきた核言説を批判的に分析する試みであり、アメリカ文学研究に新たな領域を切り開くものである。

以上のように本調査委員会は本論文の提出者が、博士（文学）の学位授与にふさわしいことを認める。